

## マドリード版『サカラメンタ提要』

### —『洋楽渡来考』再論—

皆川 達夫

筆者は昨 2004 年 11 月に『洋楽渡来考』(640 頁、日本キリスト教団出版局)なる研究書を刊行し、16・17 世紀、いわゆるキリシタン期におけるわが国への洋楽渡来の状況について論述した。とくに同書第一部において、この時期におけるわが国唯一の洋楽楽譜資料である 1605 年(慶長 10 年)長崎印刷の典礼書『サカラメンタ提要 Manuale ad Sacramenta』について考究し、類似する内容をもつ同時期のイタリア、スペイン出版のほぼ 40 点にわたる典礼書との比較検討をおこなった。

その中でもとくに、類似した書名をもつ 2 つの典礼書、すなわち 1585 年サラマンカ(スペイン)出版の『サカラメンタ提要 Manuale ad Sacramenta』、および 1560 年(1568 年再版)メキシコ出版の『サカラメントの提要 Manuale Sacramentorum』については、すくなからぬ紙面を要して長崎版との関連を検討してきた。

ところが同書『洋楽渡来考』刊行の後、マドリード(スペイン)で 1595 年刊行された同名の『サカラメンタ提要 Manuale ad Sacramenta』(Oxford: Bodleian Lib. 所蔵)の存在を知り、今回の論文において、新発見のマドリード版『サカラメンタ提要』の構成、収録楽曲、典礼的および音楽的特徴、記譜法などを詳細に論考した。その結果このマドリード版は、サラマンカ版との類似性がつよい一方、長崎版『サカラメンタ提要』とは相当程度の相違があることが明らかにされた。長崎版『サカラメンタ提要』は、ヨーロッパ渡来の唯一特定の「底本」を機械的に再印刷したものではなく、主にスペインの諸版、さらに多少のイタリア版を参照しつつ、日本における布教を意識した独自の立場にたって編纂されたという筆者の従来の見解は、ますますつよく証しされることになった。